# アカパナの手紙

かくら　こう

おはなしの喫茶室

# 第一章

白く雪におおわれた岸を離れて黒い夜の河へと、大きな船がゆっくりと動きだした。
船にはたくさんの荷物が積まれていた。そのうちのいくつかの木箱は東の大陸にある探偵事務所に届けられる予定だ。その木箱のひとつに、女の子が這いりこんで寝息をたてているなんて、船乗りのだれも知らなかった。そして女の子も、船が暗い海に向かって本当にすべり出したことに、ぜんぜん気づいていなかった。ふかふかの白パンに蜂蜜をたっぷりとたらして食べる夢を見ていた。

時計の針を戻そう。

まるで竜が昼寝しているようだと、その町のひとたちは誇らしげにいう。
そんな大きな河が町の真ん中を流れている。一年の半分が雪におおわれる寒い町だ。雪がちらちらと降っては河に吸いこまれてゆく。
町には評判のパン屋がある。「アカパナのパン屋」とみんな呼ぶ。ふかふかした、ほのかに甘い白パンがとにかくおいしい。一度でも食べると、アカパナの白パン以外はパンではないと断言してしまうほどの中毒になる。町のみんなはアカパナパンの中毒患者だ。
町のみんなのお腹を満足させるために、アカパナのパン屋の主人はせっせと早朝から夕方までパンを焼く。浮気はしない。白パンだけを焼く。それだけでいいのだし、それ以外



を焼く時間はない。
ところでアカパナのパン屋には、じつはちゃんと屋号がほかにあった。アカパナとは町のみんながいつのまにか口にし始めた呼び名だ。看板に書かれた本当の名前は、年月に晒されて薄れてもう読めない。パン屋の主人だって覚えていないかもしれない。
なぜアカパナなんて変な名前で通るようになったかっていうと、パン屋の主人が大きな赤い鼻をしていたからだ。ピエロが顔の真ん中につける道化鼻。それがそのまま主人の顔についていた。生まれつきだ。遺伝だ。主人の親父もそのまた親父もそのさらに親父も、赤いピエロ鼻だった。そして代々パン屋だった。赤鼻のパン屋。アカッパナのパン屋。アカパナのパン屋。そう、代がすすむに従って、ちょっとずつ呼び名が崩れるけれど、つまりは赤い鼻をした親父のパン屋ってことなんだ。
大きな赤い鼻はとても優秀だ。犬の鼻はよくきくっていうけれど、パン屋の主人のアカパナも負けていない。三軒離れた家の夕食に使われた調味料だって嗅ぎわける。そんな優秀なアカパナで主人は上質の材料を選び、極上の焼きあがりを嗅ぎとるわけだ。すると星だって落ちてきて食べたくなるパンができあがる。
アカパナパンに惚れこんだ町一番の美人が、とうとうパン屋へお嫁にいった時には、町の男たちはみんな酒場に集まって涙に暮れた。おれにもあんな赤い鼻があればよかったのにって。翌日、鼻を真っ赤に酔いどれた男たちは、そろって逆立ちして歩くみたいなむく

み顔だった。
初めて生まれた女の子の鼻が主人そっくりだった時には、町のみんなは複雑だった。アカパナパンの味が受け継がれるっていうのはうれしいんだけれど、女の子が真っ赤なピエロ鼻ではあんまりかわいそうだったからだ。
二番目に生まれた女の子は、奥さんそっくりのまっすぐな鼻だったので、長女の分までみんな喜んだ。そのあと、子供は生まれていない。
町のみんなの一喜一憂は結局他人事だ。心臓を青くそめて長女の未来を心配したのは、だれでもないアカパナの主人だった。おいしいパンをつくって町のみんなに喜んでもらえるようになるまで、彼だって自分の鼻が大きらいだった。子どもの頃、おおいにからかわれた。もいでしまえればいいのにって、何度もそう思った。赤い鼻の自分の親父が憎たらしかった。それがよりによって、女の子の顔についているなんて。アカパナの主人は、赤い鼻の長女の寝顔を眺めては、目尻へにじむ涙とアカパナからたれる鼻水をぬぐった。
長女が学校に通うようになると、やはり同級生にからかわれた。やい赤い鼻、ピエロ、玉に乗ってみせろよ、やいやい、そのボール鼻でキャッチボールしようよ。ただし、彼女はめそめそ泣いて黙っている子ではない。火薬が爆発するように怒って、からかう男の子たちの髪をひっぱったり、急所を膝蹴りしたり、雪玉をぶつけたり、とにかく負けなかった。というより、最後に泣くのはいつでも男の子たちのほうだった。



長女は家に帰るとアカパナの主人にも腹を立てた。自分がこんな赤くてみっともない鼻をしているのは、お父さんのせいだって。鼻だけじゃなくて顔全部を真っ赤にさせて父親を力の限りに責めた。やつあたりだ。
アカパナの主人はじつに長女とよく似た頑固者で、そのうえ一度火がつくと、全身燃えあがってしまわないと気がすまない性格だった。だから、日ごろ長女をかわいそうに思っていても、立派なパン屋として、今では誇りになった赤い鼻をあんまり悪くいわれると、どうにも黙っていられなかった。今日の夕方もそうだった。
やっと時計の針が追いついてきた。もうひと息だ。
長女が顔全部を真っ赤にさせて、ピエロ鼻についての文句をまくしたてると、パンを焼いていたアカパナの主人も頭から火を噴いて娘へ振り返った。パンをこねるたくましい腕に彼女を抱えて、そのおしりをぶったたいた。長女はぴぎゃと泣いた。その声を聞きつけた奥さんが厨房へやって来た。アカパナの主人はパン窯もふるえる声でどなった。
「いいか、この鼻は代々伝わるありがたい鼻だ。そんなにこの鼻がいやなら、うちどころかこの町だっておまえの敵だ。出ていけ」
「わかったよ。出てってやるもん。お父さんなんか大きらいだ」

長女はアカパナの主人の腕から転がり落ちて、奥さんの脇をすり抜け、ひりひりするおしりを押さえながら外へ飛び出した。紺色の夜が半分落ちてきていた。

店を閉めたあと、アカパナの主人は綿入りの上着をはおり、酒場へ出かけた。おもしろくないことがあると、彼はいつも酒場で飲んだくれる。

家を出てくる前、奥さんは鶏のスープをつくっていた。アカパナの親子がケンカすると、奥さんはいつもそうやって、ふたりの好きなスープをつくるんだ。ふたりがおいしい匂いにつられて家へ帰ってきますようにって、仲よくスープを食べますようにって、願いをこめて。台所に立つ奥さんのきれいな横顔を思い出して、アカパナの主人はなんどもグラスをカラにした。

鼻、はな、ハナ。ハナッからあのきれいな鼻がついていたら花のような女の子になっていたかもしれない。実際、奥さんの鼻をもらった妹は、町のみんなにかわいがられている。

鼻。鼻。鼻め。アカパナの主人は酒をつぎたそうと瓶を持ったが、酔っ払いすぎて手元が狂った。瓶はテーブルを転がって床に落ちた。じわじわと安酒の水たまりができる。

親切なワタクシは酒瓶をひろってテーブルに置き、別の上等な酒をアカパナの主人のグラスへそそいでやった。彼はケンカに負けた犬の顔で、ワタクシをのろりと見あげた。赤い鼻から情けなく水がたれている。パンを焼く時とはかけ離れただらしなさだ。けれども



ワタクシはアカパナの主人が好きなのだ。ひとえに。なので、こんな話を持ちかけてみた。なにせ親切なワタクシだからだ。

「ワタクシならお嬢さんの鼻をまっすぐうつくしく整えてやることができますが、いかがですか」

「アンタはお医者なのか」

「ワタクシは医者ほど無能ではありませんよ。あらゆることが可能の存在です」

「いくらかかるんだ。金はない。でもどうにかしよう。いくらだ」

くっつく寸前まで赤い鼻をワタクシに近づけてアカパナの主人はがなった。いささかどころでなく酒臭い。金など不要だ。だけれどそれでは頑固で強情な彼の気もおさまらないだろう。思慮深いワタクシはそう考えた。

「それでは雲をひとひらちぎってきていただきましょう」

「雲をちぎるだと」

「一番高い山へのぼれば、簡単にちぎってこられますよ」

「そんな雲をつかむような話、いやちぎるだなんて。どうやって」

「おや、簡単なことなのに。アナタ本当はお嬢さんの鼻などどうでもよいのでしょうか」

「なんだと。やってやるさ。待ってろよ」

アカパナの主人はテーブルを両手で叩いて去ろうとした。足元のふらつく彼を引きとめ

て、律儀なワタクシはコートのポケットから契約書と万年筆を出した。
「ではこれに署名を。アナタが雲の切れ端を手にいれるまで有効です。それ、そこに名前を。そうそう。汚い字ですが、読めないことはないですね。よろしいとしましょう。これでアナタは雲を手にいれる運命を受けいれたのです。幸運を祈っていますよ」
そうして、アカパナの主人は世界で一番高い西の山をめざす旅をはじめた。
その頃、アカパナの長女は本気で町を出てやるべく、河岸に停まる大きな船へまぎれこんでいた。怒りんぼうで頑固で意地っぱりなのは父親ゆずりだ。もしかしたら赤い鼻にそういう成分がふくまれているのかもしれない。

やがて時計の針は重なる。

船が動き出す。黒い河へゆっくりと流れる。長女は夢を見ている。ふかふかの真っ白なアカパナパンへ、とろりと金色の蜂蜜をたらして食べる夢だ。ぐうとお腹が鳴ったが、彼女の顔は幸福そうだった。さあ、船は黒い夜をなめらかにすべってゆく。

さて。

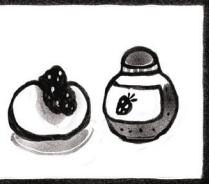
竜横たわる河の町に住まうひとびとのアカパナパンの楽しみ方を紹介したい。

どんな風にも好きに調味できるのは、シンプルな白パンならではである。

アカパナパンを食す際の参考にしていただければ幸いだ。

シンプルな朝食

「僕の朝食はアカパナパンとコーヒーです。パンにはなにもつけませんし、コーヒーもブラックです。両方とも、そのものの味を堪能したいのです。まさか、ジャムなんて！」（あご髭を整えたシックな男性）



イチゴアカパン

「わたしはお手製の苺ジャムをたっぷりつけていただくの。やさしい甘酸っぱさがアカパナパンを最高に引き立ててくれる。このおいしさを知らないひとがいるなんて、かわいそうなことね」（花柄スカートの女性）

ギャンブラーサンド

「トランプゲームにはアカパナパンのサンドイッチが欠かせません。妻の手を煩わすなんてね、我々にはとてもとても。ふう。ゲームの参加者は具材を持ち寄ります。肩身が狭いだなんて、そんなことは」（ハートのクイーンを刺青した男性）

大好き目玉パン

「目玉焼きを一枚乗せて、塩と胡椒をささっと振りかける。黄身がアカパナパンにしみこむところが、とってもおいしいんだ。何個でも食べられちゃうよ」（お腹のふくらみを気にしないキュートな笑顔の男性）

姫特製スープ

「うちの子たちは、トマトスープにアカパナパンをひたして食べるのが大好き！スープにはいろんな野菜をたっぷり使っているから、栄養満点。おいしさをパンが吸ってくれるのよ」（七人の小人を養うたくましい女性）

# 第二章

さて。

郵便配達夫にふんしたワタクシ、ここからは竜横たわる河の町に届けられた手紙を紹介していきたい。はじまりはアカパナのパン屋の、店の扉へはさまれた一通だ。

「ちょっくら雲をちぎってくる」

あきらかな酔いどれ文字に、夜を徹して夫と娘の帰りを待っていた奥さんは、あきれて心配して結局怒った。酔いが醒めたら勝手に帰ってくるだろうと踏んで、次女を抱えて長女を探した。けれど太陽が真上を過ぎても夫は戻ってこない。町のすみからすみまで歩いても、だれに尋ねても、見つからない。夕方になってもふたりとも戻ってこない。奥さんは酔いどれ手紙を握りしめて警官の詰め所へ駆けこんだ。

つぎの手紙が来たのはそれから一ヶ月経ったころだ。

すっかり細くなった手で奥さんが手紙を開けるのを、心根のやさしいワタクシはそっと見守った。町ではアカパナ

の主人が長女を連れて失踪したんだっていうのがもっぱらの真実として語られていた。毎日きれいな奥さんと次女の顔を見ているうちに、とうとういたたまれなくなっちまったのさって。奥さんの耳にも遠慮のないうわさは聞こえた。そんなはずない、そうかもしれない。奥さんが弱りきった時に届いた手紙が、これだった。

「元気か？　おれは元気だ。雲へは遠い」

書かれているのはそれだけ。あとはいくらかの金が同封されていた。奥さんと次女がふたりして一ヶ月食べる分にはちょっとだけ足りないくらいだ。奥さんには「雲」の意味がわからない。考えても考えても、なんのことだかさっぱりだ。でも、町のみんなのいうイタタマレナイ感じもしない。夫はどこへ向かっているのか、ぜんぜんわからない。

お金と意味のわからない手紙を奥さんはぼんやりと眺めた。うろこのはがれた魚みたいな横顔だ。この奥さんのきれいさっていうのは、じつのところ姿かたちじゃない。白い皮膚のずっと奥から透けるすこやかさだった。それがな

くなっていた。病気の魚みたいな奥さんのスカートを次女が引っ張った。幼い娘を膝にのせ、奥さんは短い手紙を声に出して読んだ。

「げんきか、おれはげんきだ。くもへはとおい」

何度も読んだ。

「げんきか、おれはげんきだ、くもへはとおい。げんきか、おれはげんきだ、くもへはとおい。元気か、おれは元気だ、雲へは遠い」

次女はすぐに覚えていっしょに読みはじめた。繰り返し読むうちに、奥さんにきらきらしたうろこが生えてきた。

「元気か、元気だ。雲へは遠い！」

奥さんは次女を抱きしめて立ちあがった。どんな流れも自由に泳ぎ回る魚の身のこなしが戻っていた。

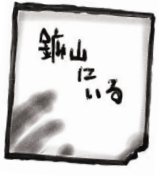
元気だ。元気か。元気だ。雲は遠い。

その日「シャツの仕立て承ります」と小さな看板を出した。パン屋へお嫁に来る前、奥さんは丁寧な職人ぶりで裁縫仕事をしていたんだ。女ってやつは人生にみがかれて、強靭なイキモノに変化する。だれもがそういう可能性を隠している。とまあ、そんなふうにいわれるらしいけれど、実際どう転ぶかはそいつ次第だとワタクシは考える。

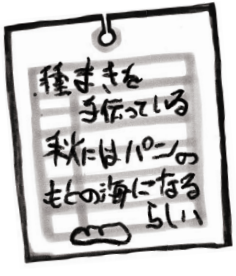


それからもアカパナの主人からの手紙は届いた。

「鉱山にいる（黒い手形つきだ）」




「種まきを手伝っている。秋にはパンのもとの海になるらしい」

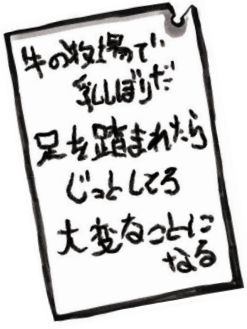


「食堂でシチュー当番だ。たまにパンを焼きたいもんだ」

「橋をつくっている。完成するとメガネになる橋なんだとさ」

「鯨漁の船に乗った。酔った」

「牛の牧場で乳しぼりだ。足を踏まれたらじっとしてろ。大変なことになる」



ひと月に一度の時もあれば、数ヶ月に一度の時もあった。必ずお金がいっしょにはいっていた。奥さんは手紙とお金を文箱へ封じて台所の戸棚の上に置き、決して手をつけなかった。シャツの仕立てにはげんだ。

アカパナの主人の手紙には住所が書かれていない。奥さんは大きな地図を広げて、消印の押された町や村を探して赤マルをつけていった。それは西へ西へと向かっていた。

長女も帰らない。奥さんはたびたび鶏のスープをつくった。煙突からもくもくと願いのこもった煙が立った。それは雲に届かんばかり。ワタクシはスープの煙をすくいあげて酒を飲む。晩酌にもってこいの美味なる煙だ。

年月はたちまちに過ぎた。冬溶けて春が匂い、はかない夏燃えて、秋に景色が枯れ暮れ、長く雪に埋もれる季節が訪れる。そうしてまたたくまに世界はめぐり変化する。

とある春の夕暮れ。すっかり大きくなって、奥さんとうりふたつの次女がてくりてくりと歩いて学校から帰ってきた。次女の記憶の中では、アカパナの主人の真っ赤な鼻だけがはっきりとしている。いつだったか、次女は母親へこんなことをいっていた。

「お父さんとお姉さんは本物のピエロになって世界を旅して回ってるんじゃないかな」

手紙だけが次女と父親をつなぐ。同じ夜に消えてしまった姉についても、覚えているのはやはり赤い鼻だ。ふたりは大きな球の上で原色の輪を青空高く放り投げては交換する。



ピエロとして自由に世界を旅してるんだ。そんな空想を描き、ついついため息をついてしまう。

「わたしとお母さんにも赤い鼻があったら、いっしょに行けたのかな」

と、これは夜空の星しか知らない次女のつぶやき。聞き逃していただければ幸いだ。

次女にとって父から届く手紙というのは、おもしろおかしくおどけたピエロの世界と長く白い冬に閉ざされてしまう小さな町をつなぐものだった。学校帰りに郵便受けを覗くのは次女の楽しみだった。でも、ここ半年くらい、父親からの手紙は途絶えていた。だから最近では、喜ぶ準備とがっかりする準備を半分ずつで、次女は郵便受けを確認するようになった。

桃色にそまる夕暮れのその日も、父親からの手紙はなかった。けれど、品のいい白い封筒がつつましく彼女を待ち受けていた。

見覚えのない筆跡だ。習い始めの子どもへのお手本になるようなきれいな筆跡だった。

宛名はアカパナの主人とご家族一同様。

裏の差出人には。

次女は封筒の裏を見て、ひっくりかえった小さな叫び声をあげた。家へ駆けこみ、鶏のスープをくつくつ煮こんでいる奥さんへ裏向きにした封筒を渡した。奥さんはそれを見ると、次女そっくりのひっくり返った声でもって驚いた。そしてすぐさま封筒をびりびり破っ

て手紙を開いた。ふたりはふたごみたいな顔を寄せ、ほっぺたを手紙の上でくっつけた。

「おひさしぶりです。お元気ですか。わたしは元気です。今、探偵事務所で助手をしています」

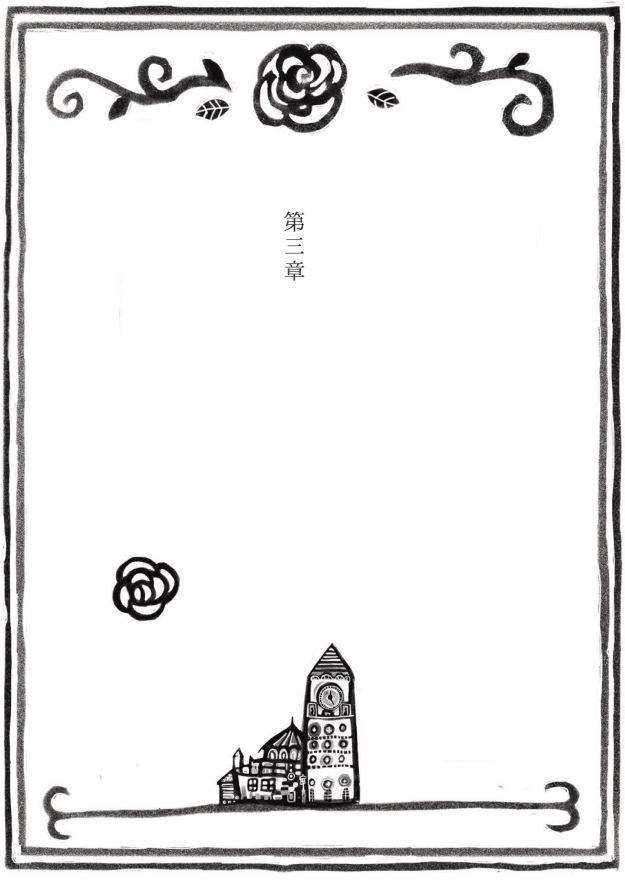
写真が同封されていた。

時計塔がそびえる赤いレンガの街。遠くで海と空の境界が白くぼやけている。時計塔の前に颯爽と立つ若い女の顔には真っ赤なピエロの鼻。

長女だ。

だれかがふざけて赤い鼻をくっつけて遊んでいるのでないなら。まちがいなく、それはアカパナの長女の写真だ。

奥さんと次女はほっぺたをくっつけたまま肩を抱き合って笑った。それはここ数年でワタクシが見たどの人間の笑顔よりも、はなやかにかがやいたものだった。



# 第三章

さて、変幻自在なワタクシはたくましい翼をもった鳥になろう。

アカパナの奥さんがベッドで寝息をたてる時刻、隣の部屋の格子窓からランプの灯りがもれていた。次女は窓辺の机で手紙を書くと、忍び足で台所へ入り、そうっと踏み台を動かしてのぼり、戸棚の上に置かれた文箱をテーブルへ移した。あらかじめ用意した木箱へ中身をすべて移し変え、一番上に手紙をそえてふたをし、丁寧に梱包した。カラになった文箱を戸棚へ戻した。

翌日、学校へ行く前に次女は郵便屋へ寄り、梱包した木箱をたくした。

次女の小包は船に運ばれ、河を流れて海へ出た。東へ、東へと船は行く。ワタクシはマストで翼をやすめる。船員が働き酒を飲んで眠りまた働く。太陽が海におぼれる時には世界が燃える。

ぐんぐんと波をこえて、やがて船は東の大陸へたどりついた。海鳥がはなはだやかましく鳴いて飛びまわる。ワタクシを威嚇するものもいるが、寛容なワタクシなので黙してやり過ごす。たくさんの荷が船からおろされた。港の先にはレンガの街並みだ。青い空にひときわ高く時計塔が突き出ている。次女の小包は時計塔の街の郵便屋が引き受けた。郵便局に運ばれ仕分けされた翌日、小包は馬車の荷台に積まれて、にぎわう街中へ出発した。頭上を飛翔するワタクシを馬が警戒する。ほどなくして馬車は時計塔の前で止まり、郵便配達夫は次女の小包とほかの手紙とをたずさえて、扉を叩いた。